

# 「北東アジア国際政治から見た

## 「これまで」「これから」の柏崎刈羽」



新潟工科大学教授

判 澤 純 太

(北東アジア政経戦略分析専門)

### 1、柏崎という土地との出会い

関西文化圏（鳥取県米子）に生まれその心象風景の中で育った私が、縁があつて新潟柏崎に、男の身ながら嫁いで来た感じである。阿部猛雄初代新潟工科大学学長が「北陸に工学の火を灯して欲しい」と呼びかけたのに、東京から共鳴して応じて来た。それ迄私は、中央官衛に職を得て、忙日をひたすらこなしていた。

私は、人と生まれたからには、「地方」で、「地方主義」を信条として生きるつもりがあった。自分の剥きだしの本性を、地方の風土の中で涵養し、鍛えたかったのである。人と人の出会いも、人と土地の出会いも、

ドラマチックであるが筋書きがある。縁である。私が柏崎に呼ばれて来た事にも、縁が働いていると感じている。

外来者の私が柏崎に来たことによつて、土地に何程の貢献が出来るだろう？ 私は何故柏崎と結ばれたのだろうか？

柏崎は綾子姫を呼び貞心尼を呼んだ土地である。小学生が「夕日の絵」をよく書くのに気がついた。

川勝平太が東北地方を「森の国」と呼んでいる。関西以西は「海の国」である。「森の国」は、アイヌ文化が文化の低層にあることを言っているのだと思う。

「海の国」は、海洋を通じて、大陸（主として中部中国）と交流、交易で繋がっていることをいっていると思う。私は「海の国」

の子供の一人として生まれた。

それから川勝によれば、富山が「山の国」で、「森の国」と「海の国」の間をさえぎっている。

これから以下は私の見解になるが、その富山の隣に新潟・柏崎があつて、海（日本海）をチョツと回つて、「山の国」と「海の国」を結んでいる。

また一方、内陸ルートを見ると、出雲崎、柏崎は、佐渡からの「金の道」が甲州を通つて江戸へ到る出発点である。

柏崎は、「山の国」と「海の国」を海で結ぶ「結び目」であり、また、日本海側と江戸とを結ぶ「内陸ルート」の「結び目」でもある。結び目には独特の「交流文化」が湧き上がり、蓄えられるのだ。その魅力こそが綾子を引きつけ、貞心尼を引きつけたまさに理由だと考えれば、納得がいくだろう。

柏崎の文化土壌が「交流の文化」であることが分かった。文化環境は本源に帰る時に蘇生する。21世紀に柏崎が柏崎らしくあり、発展を遂げるためには、柏崎（刈羽）らしい文化事業は、どの様なものであるべきだろうか？

## 2、モンゴルの場合

2010年8月に、泉田裕彦知事とモンゴルを1週間ばかり旅行して来た。モンゴルは日本の4・1倍の国土面積があり、人口280万人の国である。平均年収は15万円であり、過去4年間で3倍に増えている。

知事は、モンゴルとの多方面交流(産・官・学)を、県として今後積極的にやっつけていこうと計画している。人口が小規模な発展途上国を相手に、「県単位外交」、「地方政府外交」の一つの新しい「新潟モデル」を作ろうと試みているのである。

モンゴル国と交流する大きな利益は2つある。

(1)中央アジアに日本の「友邦」を作ること。モンゴルは中央アジア6ヶ国の中で指導的国家であり、モンゴル国との外交の「新潟モデル」が成功すれば、そのインパクトは、他の5ヶ国に広がっていくことができる。

(2)中央アジア、アラル海、カスピ海、黒海(その先には地中海)に通じるルート沿い一帯地域の情報を、モンゴルの知恵と協力を借りて収集すること。この事によって

日本政府は、かつて麻生太郎元首相が唱えていた「繁栄の弧」構造を内側から照射することができ、外側(海洋ASEAN側)からの情報観点と合わせて、「繁栄の弧」の構造を立体的に理解する上で大いに役立てられるのである。

## 3、「地方的国際主義」志向性の

### 歴史的土壌

柏崎の小学生が画く「夕日の絵」の向こうに、ユーラシア大陸が悠然と広がっている。常に大陸に目が向かう土地柄だという事が、柏崎の大きな特徴である。

柏崎は半分は「海の国」だ。「外交的マインド」がある。そして半分は「森の国」だ。内向的な「地方主義」を暮しの支えとして生きている。

「地方主義」は、メガロポリス同士の国際政治外交には不向きだが、「海の国」の「外交マインド」と結合して誕生する「地方的国際主義」は、国際社会の過半を占めている「地方社会」と、広く深い交流をする国際対応にむしろ優れている。「地方的国際主義」こそが、新潟の、柏崎の、他には無

いオンリー・ワンの歴史的特性なのである。新潟県知事の訪蒙のタイミングが象徴している様に、日本は今、中央アジア諸国との連携性を必要としている。新潟県に、オンリー・ワンの「地方政府外交」の主役の役割を担うことが期待されている。歴史的志向性を持つていない土地では、このような役割を担うことができない。

## 4、「中央アジア6ヶ国文化領事館」

### 設立構想

一村一品運動、あるいは地産地消運動等、地域の活性化、自立化が地域活性化の手段である。柏崎は歴史的文化環境、志向性によって、「地方的国際主義」を創造的に活性化にしていっただろうか？

具体的には、「文化領事館」(名譽領事館支部)を中央アジア6ヶ国のために設立するのである。中央アジア6ヶ国との青少年交流を柏崎市として重んじていこう。

### 4-1 「対等」につきあうことと方法

日本は国際社会で尊敬されて生きていかなくてはならない。そのためには、発展途

上国ともつき合っていかなければならないが、「対等」なつき合いでなければ交流の発展は望めない。

たまたま重要な小国群（中央アジア6ヶ国）が新潟の日本海対岸にある。

モンゴルの平均年収が15万円であることは既に論じた。他の5ヶ国は次にカザフスタンが10万円で、その他の国は更に下がる。これらの国と「対等」につき合う方法として、「地方政府外交」が有益である。この方法ならば、「国政レヴェルの威圧的な」巨艦巨砲外交」の介入がない。新潟県230万人は、ウランバートル市（昼間人口150万人）と「規模」的に「対等」に交流することが出来る。

技術移転は小規模になるが、新潟県側は産・官・学連携チームの編成で働きかける事で、手堅い信用を相手先から獲得できる。支援の性質は、「ピン・ポイント」であるが、しかしそれはそれで十分なので、「新潟モデル」を刺激的参考（インセンティブ）にして、モンゴル側は近代開発に主体的に取り組む力を身につける。

#### 4-2 認識の共有部分（被爆）

中央アジア諸国は被爆国である。新疆、セミパラチンスクでの数限らない核実験の放射能を被つて来た。それ故非核思想に大変意識の高い国民性である。

一面、核エネルギーの平和利用（小型原発）の必要性にも、クリーン・エネルギー志向性の一環として強い関心がある。

#### 4-3 中央アジア6ヶ国の青少年との

##### 文化交流の場を提供

毎年何名かつつでも、中央アジア6ヶ国の青少年男女を柏崎に招き、柏崎の青少年と交流する事業を起こせないだろうか？

中央アジア6ヶ国の青少年たちは、柏崎という場で日本人青少年と交流体験をするともに、彼ら6ヶ国同志でも交流する場になり貴重な体験になるであろう。

それらの交流体験は、新潟県が推し進めている、中央アジア6ヶ国との「地方政府交流」を厚く下支えし、日本、新潟の青少年の「地方的国際主義」感覚を一層質的に向上させるであろう。

なお、五泉市では、4、5年前からモンゴルの子供たちとの交流や、モンゴルの都

市環境美化に積極的支援活動に取り組んでいる。柏崎が青少年を対象に、かつ中央アジア6ヶ国を拡大対象にして交流に取り組めば、相乗効果が生まれるだろう。

#### 4-4 非核（兵器）運動パートナーシップ

1992年9月、モンゴル国は「非核地帯化」を宣言した。98年12月、国連総会決議は「非核兵器国の地位」を承認した。モンゴル宣言は、モンゴルの核エネルギー政策の方向を決定づけている。

モンゴルは1960年代初、旧ソ連が進める「核（兵器）のバランス的拡散」戦略の一環に連なり、アジアでは中国に次ぐ（北朝鮮を上回る）核物理学者（研究者）数を擁している。つまりモンゴルは、資源としてのウラニウムを国内に豊富に産出し、核の軍事転用能力も十分に持っている。そうでありながら、モンゴルは国際社会の中で、核エネルギーの平和利用のみを追求する国策を明確に表明している。

開発能力を持ちながら、非核（兵器）政策を追求する国家として、モンゴルと日本はアジアで双璧な国である。日本・モンゴル非核パートナーシップを、新潟から、柏

崎から進める事は、アジア全体の非核化に弾みをつけるであろう。

パートナーシップを強める為には、人的交流が欠かせない。世界最大の原子力発電所を有する柏崎市は、核技術安全管理の有数の情報センターでなくてはならないとともに、非核（兵器）運動の中心的交流地でもある必要がある。

柏崎市を、活発な日・蒙青少年交流、日・中央アジア6ヶ国青少年交流の舞台にしたい。

## 5、柏崎の中央アジア6ヶ国へ

### 向けた企業進出

柏崎は新潟県が推進する産・官・学連携「地方政府外交」に協力し、中央アジア6ヶ国に企業進出する能力がある。

柏崎はコンパクトな町である（人口9万人）。3方を山に囲まれて1方が海なので、海洋移動性はあるが、陸路が呼ぶ複雑な文化混入による係争がない。しっかりとした農業基盤の上に、幾つかの世界標準級特化技術工業が根づいている。「柏崎産業モデル」は、新潟県「地方政府」が中央アジア6ヶ国を対象に計画をしている、企業進出

「新潟モデル」に規格が一致している。

### 5-1 企業進出「新潟モデル」

新潟「地方政府」が推奨する企業進出「新潟モデル」は、以下のものである。

- (1) 県内大手、あるいは県内特化技術企業の規模で進出する。
- (2) モンゴル国の近代化発展に貢献する方法で事業展開する。
- (3) モンゴル国の技術者養成と、モンゴル国への技術移転に協力する。

この事業の成果は目覚ましいものになるに違いないと予測できる。その理由は、

- (1) 県内大手企業及び特化技術企業の技術レベルは世界標準である上、進出先当地は、周辺近隣地域に「距離の壁」（後述）がある理由によって、ライバルがいない環境にある。

- (2) 販路は中央アジア6ヶ国（2000万人）、東シベリア（500万人）、中国大西域（2億人）と広大である。

- (3) 先に進出している韓国企業と技術補完性がある。

- (4) モンゴル国政府及び地方政府が企業展開と補助スタッフの供給を全面支援してくれる。

- (5) 新潟県が進出を全面支援してくれる。進出企業は、中央アジアの需要に対応する「国際製品」を産出する能力を獲得できる。

### 5-2 雇用創出協力

中央アジア6ヶ国で大学教育を受けたり、日本に留学に来る留学生たちは、高等教育、高等技術を身につけたとしても、日本で就職するにふさわしい企業が見つからないから、そこで近代化への「離陸（テイク・オフ）」がとどこおってしまうのである。モンゴルへの新潟の企業進出、現地での「起業」によってこそ、人作り支援事業は完結する。

柏崎は中央アジア6ヶ国の青年のために、教育の機会を提供する事ができる。その事の延長として、留学生とモンゴル（中央アジア6ヶ国）進出企業との就職橋渡しも、「文化領事館」事業を通じて請け負う事ができるだろう。

「文化領事館」は、更に中央アジア6ヶ国の各種青少年団体、社会団体との交流パイプを幅広く形成することができる。そのような人事交流は、新潟「県」の「地方政府外交」の堅実な一翼を担うであろう。

### 5-3 露、中の「距離の壁」

東シベリアのロシアの人口は、最大の市がイルクーツクの150万人で、次がハバロフスクの100万人、その次が沿海ウラジオストックとナホトカを合わせて100万人である。総人口は500万人と見積つてよい。しかし、最大人口を有するイルクーツク市でさえ、実態は「巨大な村」(ポリシヨイ・ゼムリヤー)であるに過ぎない。

モスクワ、サンクトペテルブルグから、あまりにも「距離の壁」がある為に、東シベリアは資源基地としての存在しか認められていない。

一方、工業都市である北京・天津圏とモンゴル国の間には、広い内蒙古自治区(人口600万人)が狭まって横たわっている。中国共産党政府は建国時、内蒙古経済の心臟部である張家口を取り上げて河北省に編

入する見返りに、内蒙古人の不満を押さえる必要で数次の修正によって自治区を段々に拡大した。

中国政府が内蒙古を飛び越えてモンゴル国に集中投資しようとするれば、内蒙古人の強い反発を生み、「離反運動」が直ちに蠢き出すだろう。かといって、内蒙古に集中投資した上で、内蒙古人を使ってモンゴル国に間接投資しようとしても、今度は内蒙古人が経済実力をつけて、「民族統一運動」を呼び醒ますのである。

この様に、露、中両国は中央アジア6ヶ国への集中産業投資に関して、「距離の壁」を抱えている。

日・蒙関係には、その様な障害は一切ない。ただ、日本側に感心が低いだけなのである。

## 6、「地方主体」の交通体系整備

「地方」は「中央」との関係において、補完性と自立性を求められる。自立性の条件として、交通体系の整備は死活的に重要である。新潟と柏崎の例を点検したい。

### 6-1 只見線と飯山線の連結

新潟県の観光資源創造に、私に一つのアイディアがある。

只見線と飯山線をいずれも長岡乗り入れにして、連結し、日本一の内陸線地方鉄道を作るのである。新潟から、北は福島、岩手、宮城内陸ルート、南は長野、岐阜、京阪神内陸ルートを作る。首都圏第2南北連結線と定義づけるが、同鉄道の主用途は観光である。日本第1級の観光路線である。

同鉄道の存在を奥座敷に持つ事で、「ユーラシアン・ゲートウエー」(新潟は国際級新潟空港、新潟港、西港、直江津港を有する)を自認する新潟は、遜色のない受け皿を準備できる。

新潟県は、企業進出に伴って中央アジア6ヶ国の各層から来訪してくる人々を、一層十分な観光で接待し、厚い、財産となる人間関係を築くことができる。

### 6-2 ほくほく線ダブル・ライン構想

次に、柏崎を検討する。交通体系が円滑化し活性化すれば物流経済が動く。交通体系を活性化させる要点は、行き止まりを無くすことに尽きる。つまり、

ループ型の交通網を編成することである。柏崎は車社会対応では交通インフラが十分に整っているが、補完関係にある電車ルートが不備である。

柏崎は、小千谷生活圏との至便な電車交通接合が欠けている。

ほくほく線は、2012年の北陸新幹線全開通によって、集客数が激減する問題がある。何とか対策を考えなければならない。ほくほく線を、十日町―直江津、高田ルートと、十日町―直江津―柏崎ルート(別第3セクターで)の2路線にして、交互に往復運行するプランの導入を提言したい。

## 7、結 言

柏崎は豊かな土地に恵まれ、安全で静謐な環境です。しかし、未来対応型であろうとすれば、少しづつインフラを修正、改良していかなければなりません。

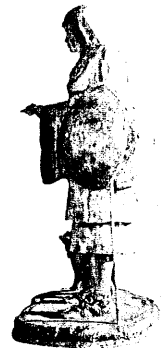
私は柏崎に16年住んでいます。まだまだ「異分子」(旅の人)です。その眼が新潟、柏崎に役立てばと思つて、本稿を草しました。取捨選択していただければ幸いです。共感して戴いた部分は、幾分でも新潟、柏

崎に恩返しができた。喜びにいたします。私の専門的観点から、新潟、柏崎の発展の「キー・ワード」は、「地方政府(主義)型」と「国際化」の結合だと結論致します。

柏崎と刈羽の関係は、柏崎は「広域行政」で刈羽とよいタッグ関係を組めると思います。ダブル・フォーカス(2重焦点)行政

の利点で、核安全管理により透徹して目が行き届くと思います。

(2010年8月23日稿)



# 柏崎・刈羽のこれまで・これから 地域の国際化

(財)柏崎地域国際化協会

会長 今 井 元 紀

柏崎地域の国際化はユースホステルの世界大会の誘致により幕を開けたと言つて過言ではないだろう。300人も外国の方々が民族衣装を身につけ柏崎の街をあるき、ホームステイ・武道体験を含む柏崎での滞在を楽しんだ。市民の側も日本紹介を通して、50人以上十数カ国語のボランティア通訳とともに交流を楽しんだ。20年以上たった今でも交流の続いている家庭もあるという。「出会ったときはお客様」でも「別

れるときはお友達」になることを私は信じている。

その後、南米出身の方々が増え、日本語教室が開かれ国際交流のイベントが多く企画された。数年の予定で来日したのに生れ故郷より柏崎滞在が長くなってしまったと語るブラジル人の友人もいる。

当協会が財団になる前は、市役所の国際交流推進室、国際化推進室が地域の国際化を推進していた。平成8年に民間の団体と